

「いぬねこ彩彩」展によせて

しんなんびん

沈南蘋「一笑図」をめぐって

—江戸日本における南蘋画学習の—様相—

沈南蘋(沈銓。1682～1760～?)は、清時代中期(18世紀)に活躍した呉興(今の浙江省湖州市)出身の画家です。雍正9年(日本・享保16年[1731])、日本の長崎に来航し、1年10ヶ月の滞在中に、多くの日本人画家たちに画を講じました。鮮麗な明代宮廷花鳥画と、厚重な北宋水墨山水画の表現を継承する、鮮やかで写実的な花鳥動物画は、当時の日本人々を驚嘆させ、その画風に追従する「南蘋派」の成立を促すなど、日本の花鳥動物画の展開に大きな影響を与えました。

沈南蘋の作品には、来日の年の作「老圃秋容図」(展覧のお知らせ【図1】。静嘉堂文庫美術館蔵)など、猫と犬をモチーフにした作品がいくつか残っており、日本の犬図・猫図に少なからずの資を与えたことが窺えます。本稿では「一笑図」(図1。個人蔵)という作品をめぐって、日本美術史における南蘋の犬図が果たした役割の一端を述べます。

本図は、天に向かって伸びる青竹の下に、茶白斑で流麗な毛並みの、爛々と瞳を輝かせた犬が座しています。その前

方には、水墨で立体感をつけた岩石と、白菊を表します。画面右上に、「南蘋沈銓写」との款記があります。制作年は不明ですが、付属する江戸後期の文人画家・谷文晁(1763～1840)の極書(文政7年[1824])に「一笑図。南蘋沈銓正筆。…」とあり、本図が「一笑図」として、遅くとも19世紀前半には日本に伝来したことがわかります。

「一笑図」とは、犬と竹を共に表すことで「笑」を意味するという、吉祥の寓意をもつ画題です。北宋の士大夫・王安石(1021～86)が、「篤」の字のつくりを、竹で馬を鞭打つことに由来すると説明し、それを聞いた蘇軾(1037～1101)が、「では竹で犬を鞭打てば『笑』になるのか」と戯れに問うた逸話に由来するとみられます(北宋・曾慥撰『高齋漫録』)。画題として成立したのがいつ頃かは判然としませんが、後述するように、北宋の画家である易元吉(11世紀)の作とされる「一笑図」が、清時代には知られていました。また明の宣宗皇帝(在位1425～35)の作と伝わる「一笑図」(図2。宣徳2年[1427]。ネルソン・アトキンス美術館蔵)等が今日も残

り、宮廷等でしばしば描かれる画題だったとみられます。

さて、沈南蘋の「一笑図」は、19世紀の日本に少なくとも二点存在したことが、谷文晁とその一門による粉本・模本資料(「谷文晁派(写山楼)粉本・模本資料」)から知れます。うち一点(図3)は、今回紹介する「一笑図」を写したもので、本図が当時から南蘋画学習の資となっていたことを窺わせる貴重な資料です。残りの一点(図4)は、犬や竹のモチーフは本図とほぼ同図様ですが、前景に白菊がなく、斜面に雑草を多く表します。また画面左上の「乾隆三年写/易慶之一笑/図於吳趨抱/翠楼。南蘋沈銓。」(斜線及び句読点は筆者による)という自題から、本図が帰国後の乾隆3年(1738)、吳趨すなわち蘇州周辺の抱翠楼という場所で、北宋の易元吉の「一笑図」を写したものだといわれます。残念ながら原図は伝わりませんが、粉本は原図の優れた形態描写や毛描きを、濃淡墨と筆線、淡彩で丁寧に写し取っており(図5)、おそらく構図等は易元吉に倣いつつも、それを沈南蘋の得意とした迫真的表現のもとに表した作だったと窺えます。この乾隆3年款「一笑図」と比較すると、今回紹介する「一笑図」は、犬の形態や着彩表現などがやや堅く平面的な印象を受けます。したがって、乾隆3年款の作を原

図とする、工房などによる模本とみなすことができるのではないのでしょうか。

この「一笑図」という画題の、日本への正確な伝来時期は判然としませんが、特に江戸中～後期には、犬を描く際のテーマの一つとして人気を博したことが、渡辺始興(1683～1755)「芭蕉竹子犬図屏風」(大和文華館蔵)、長沢蘆雪(1754～99)「一笑図」(同志社大学文化情報学部蔵)等から窺えます。この頃、日本の文化人の間では既に、竹と犬で「笑」を意味するという、吉祥的な読み解きが広く共有されていたこととなります。日本の画家達は、当時伝来していた沈南蘋の「一笑図」などから、犬の表現だけでなく画題も学ぶことで、これまでにない多彩で魅力的な犬図を生み出していったと考えられるのです。

(都甲さやか)

※挿図2は“Eight Dynasties of Chinese Painting”, The Cleveland Museum of Art, 1980. 挿図3, 4, 5は東京大学東洋文化研究所・東アジア美術研究室/東洋学情報センター『谷文晁派(写山楼)粉本・模本資料データベース』(<http://cpdb.ioc.u-tokyo.ac.jp/tani-buncho>)より転載しました。

※図3, 4, 5の本稿掲載につきましては、谷文晁派(写山楼)粉本・模本資料ご所蔵者様に格別のご高配を賜りました。ここに記し、深く感謝の意を申し上げます。



図1



図2



図3



図4

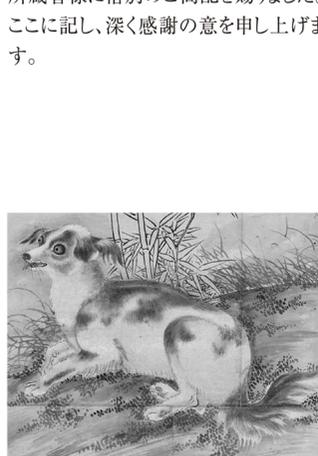


図5

季刊 美のたより No.224

令和5年9月29日

発行 大和文華館